



かたりし継げば古へ思ほゆ：土理宣令の歌

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-12-24<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 阪上, 望<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00016660">https://doi.org/10.24729/00016660</a>                 |

# かたりし継げば 古へ思ほゆ

## ——土理宣令の歌——

阪上望

### 一 はじめに

土理宣令の歌一首

み吉野の 瀧の白波 知らねども かたりし継げば 古へ思ほゆ

(3・三三三)

万葉集にある土理宣令の三二三番歌は、一般的に次のように解釈され、訳される。

一首は、

み吉野の宮滝に立ちしきる白波、この白波のようにその昔のことを知らない私だけれど、人びとが次々と語り継いでくれたので、いにしえのことがまじまじと偲ばれる。

の意。吉野の宮滝に来て、人から伝え聞いた、天武天皇の吉野入り、六皇子の吉野盟約、持統天皇の吉野行幸など、

さまざまな吉野ゆかりのことどもを偲んで詠んだ歌である。  
う。  
〔訳注〕

通説は、吉野の宮滝へ行き、吉野の昔を知らないけれども、人からかたり継がれるので、その昔が思い起こされる、とする。当該歌の「古へ」の具体がいつであるかは多少注釈書によつて相違が認められるものの、その他の部分に関しては、概ねこの通説から外れるものはない。しかし、この解には、以下の三点が問題として存在する。

- ① 「かたりし継げば」を「人から伝え聞いた」とすると、その表現がないにも拘らず、「かたる」の主格が第三者となる。
- ② 上二句を序詞として扱うと、「知らねども」の対格が不明であり、結句の「古へ」によつてそれを補説する必要がある。
- ③ 「知る」の主格が歌の中の私、「かたる」の主格が人々、

「思ほゆ」の主格が歌の中の私と、主格の転換が起きる。そこで、本論はこの三点を中心に、歌表現に沿って、この歌の解釈を再考する。

### 二「かたりし継げば」の主格について

まず、問題点の一点目「かたりし継げば」の主格が第三者でよいか検討するため、「かたる」の主格が第三者となる場合の特徴について考えたい。「かたる」は、「かたらふ」を含め、集中に四十九例存在する。このうち、「かたる」の主格が一人称もしくは二人称である用例は、二十二例。次の二例が、主格に一人称や二人称をもつ典型例といつてよいであろう。

ア 布勢の浦を 行きてし見ては ももしきの 大宮人に  
かたり継ぎてむ (18・四〇四〇)

イ く父母も うへはなさがり さきくさの 中をを寝むと  
愛しく しがかたらへば いつしかも 人となり出でて  
悪しけくも 良けくも見むと (5・九〇四)

アの歌は、「ここに、明日布勢の水海に遊覧せむと期し、よりに懷を述べ各作る歌」の題詞をもつ歌群中の田辺福麻呂の一首である。「大宮人にかたり継ぎてむ」と、助動詞「む」によつて自らの発話の意思を表している。イの歌は、山上憶良の

「男子の名を古日といふに恋ふる歌三首」の長歌。「かたる」の話し手は、二人称の「し」を用いて表されており、それが息子の古日であることは明白である。

また、次に掲げるウの「かたる」の話し手は、二人称とも三人称ともとれる用例である。

ウ く立ち向かひ 競ひし時に 我妹子が 母にかたらく  
倭文手纏 賤しき我が故 ますらをの 争ふ見れば (9・一八〇九)

この「我妹子」は、歌の中の私が菟原処女に対して用いた言葉であり、一般的に二人称として用いられる「我妹子」とは用いられ方が違う。ここは、三人称とみなすこともできるが、ひとまず、言葉の上では二人称であるため、二人称としておきたい。なお、このウについては、仮にこれを三人称ととっても行論に支障はきたさない。また、これら一人称や二人称で用いられる用例は、至極当たり前の用例であり、特筆する点はないだろう。

次に、三人称が主格となる用例であるが、二十五例のうち、主格が明示されている例は十五例、非明示例は十例である。主格が明示される用例は、例えば、

エ 里人も かたり継ぐがね よしゑやし 恋ひても死なむ

誰が名ならめや

(12・二八七三)

であり、こうした用例も一人称、二人称同様、特に問題はあ  
るまい。また非明示例のうちの一例は、

才 大汝 少彦名の 神代より いひ継ぎけらく 父母を

見れば貴く 妻子見れば かなしく愛し うつせみの

世の理と かくさまに いひけるものを 世の人の 立

つる言立て ちさの花 咲ける盛りに はしきよし そ

の妻の子と 朝夕に 笑み笑みせずも うち嘆き かた

りけまくは とこしへに かくしもあらめや 天地の

神言寄せて 春花の 盛りもあらむと 待たしけむ 時

の盛りそく (18・四一〇六)

と、部下である史生尾張少昨の左夫流児との関係をさとす家持  
の歌で用いられている。この用例は、誰が話し手であるか、そ  
の具体は示されていないものの、『全集』が、「語りけまく―ケ  
マクは回想の助動詞ケムのク語法。下の『待たしけむ』と応じ  
る。」と述べるように、「待たしけむ」から、少昨がその妻に対  
して話したことが察せられる。

非明示例の残る九例は、歌の中でその話し手が誰であるかそ  
の具体はわからないものの過去や未来の人間が話し手として想  
定されている例である。

カ 天地の 遠き初めよ 世間は 常なきものと かたり継

ぎ 流らへ来れ 天の原 振り放け見れば 照る月も

満ち欠けしけり (19・四一六〇)

キ 土やも 空しくあるべき 万代に かたり継ぐべき 名

は立てずして (6・九七八)

カ の歌は、過去からかたり継がれてきた用例の典型例。この  
歌は、「天地の 遠き初めよ」と、助詞「よ」と、「流らへ来  
れ」を用い、過去の一点を起点として、その過去からかたり継  
がれてきたと歌う。キの歌は、「万代に」とあり、未来の人間  
が「かたり継ぐ」例である。

なお、この未来の人間が話し手となる用例に、

ク ほととぎす まづ鳴く朝明 いかにせば 我が門過ぎじ

かたり継ぐまで (20・四四六三)

も含めた。この「かたり継ぐ」について、『全注』は、

語り継ぐは後世まで語り伝えること。この句このままでは  
どの語にかかると修飾語が不明。卷第十七の初めの方に「ほ  
ととぎす今し来鳴かば万代に語り継ぐべく思ほゆるかも」  
(三九一四)という歌があり、これに合せて、懐かしく思わ  
れる、という言外の気持を表わす語に続いていると解して  
おく。

と述べる。クの歌について、引用中にある三九一四番歌から「万代に」を補って解釈することは、最近の通解である。本論でもこの立場をとり、未来の人間が話し手となる用例とした。<sup>(6)</sup>

これら過去や未来の人間が話し手として想定されている用例は、歌表現の中で未来や過去の時間とともに「かたる」が存在しており、「かたる」はそういった表現なくしては第三者性を表すことができないように思われる。

さて、ここまで、四十九例中四十七例について述べてきた。残る二例は、「かたる」の解釈が割れる次の二首である。

ケ あしひきの 山橋の 色に出でよ かたらひ継ぎて 逢

ふこともあらむ (4・六六九)

コ かたり継ぐ からにもここだ 恋しきを 直目に見けむ

古へ壮士 (9・一八〇三)

ケの「かたらひ継ぐ」は難解である。この歌を、『新大系』は、

(あしひきの) 山橋の 実のようにはつきり色に出て下さい。

そうしたら、人々が語り伝えて逢う機会もあるでしょう。

と訳す。これは、『新大系』に、

「語り継ぐ」は、「里人も語り継ぐがね」(二八七三)、「も

もしきの大官人に語り継ぎてむ」(四〇四〇) などと同じ

く、人から人へ語り伝える意。

とあるように、「かたらひ継ぐ」を「かたり継ぐ」と同様に扱っているためである。一方、『大系』は「かたらひ継ぐ」を、次のように訳す。

山橋の実の色のように、顔に気持を現わしなさい。そうすれば、互に言葉を交しつづけて、逢うこともあるでしょうから。

『大系』の「言葉を交しつづける」といった意味の言葉は、「かたらふ」のみで表現されており、「継ぐ」を必要としない。また、お互いに何度もかたり合うと解すれば、結句の「逢ふこともあらむ」との整合性もとれない。前者の『新大系』の説に従い、「はつきりあなたの気持ちを出してください。そうすればそれを知った人が話し伝えて逢うこともありましょう」とすべきであろう。この歌は、人々がかたらなければ、理解できない歌であるが、今は慎重を期すため、主格の解釈が安定しない用例に加えた。

最後に、コは、田辺福麻呂の菟原処女伝説を主題にした歌である。この用例は、『新大系』が、

語り継ぐだけでもこんなに恋しいのに、直接目で見た昔の

若者はどのようであつたらう。

と訳すように、「かたり継ぐ」主格を歌の中の私と解釈する説と、『新編全集』のように、

伝え聞いた だけでもこんなに 恋しいのに 目でじかに  
見た 昔の若者はどんなだっただろう

と、その主格を歌の中の私以外の人物に解釈する説で安定しない。後者を取ると、当該歌の通説と同じく人々が私にかたり継ぐこととなる。この『新編全集』の解釈は、コが、

葦屋の 菟原処女の 奥つ城を 我が立ち見れば 永き  
世の かたりにしつゝ 後人の 偲ひにせむと 玉梓の

道の辺近く 岩構へ 作れる塚を 天雲の そきへの極み  
この道を 行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ 或

る人は 音にも泣きつゝ かたり継ぎ 偲ひ継ぎ来る 処  
女らが 奥つ城所 我さへに 見れば悲しも 古へ思へば

(9・一八〇二)

の反歌であり、長歌の「かたり継ぎ 偲ひ継ぎ来る」を受けているためであろう。コ用例は、反歌である以上、長歌に依拠する可能性を否定できず、短歌である当該歌と同じように扱うことはできない。

以上、「かたる」の話し手が三人称である用例をみてきたが、基本的に第三者が発話していることが明瞭な用例ばかりであつ

かたりし継げば 古へ思ほゆ——土理宣令の歌——

た。一方、当該歌は、三人称であることを示す表現が存在しない。通説のように「人々が私にかたり継いでくれたので」と唐突に第三者が話し手となるとは理解しづらいだろう。この点に鑑みれば、当該歌の「かたりし継げば」の主格は一人称、つまり歌の中の私ということになる。

こうした状況の中、通説が人々を主格とするのは、諸注釈が上二句を背景として捉えるためである。そこで、次に「み吉野の 瀧の白波 知らねども」についてみていく。

### 三 み吉野の 瀧の白波 知らねども

当該歌は、『私注』が、

シラナミの音の類似で次のシラネにつづく序歌。但し吉野に於ける作で、実際の吉野川を見て居るのであらう。

と述べるのに顕著なように、吉野に行つて歌われたとされている。また、「知らねども」については、『総釈』が、

瀧の白浪は「しら浪しらねども」となつて序詞である。従つてしらねどもといふのは、瀧の白浪の事では無くて、吉野の昔の事を云つてゐるのである。

と注する。吉野で歌つたことを前提として解釈を進めているため、「み吉野の 瀧の白波」を知らないとなると、矛盾が生じ、

「知らねども」が何を知らないのか説明がつかなくなるからである。しかし、当該歌の題詞には、「土理宣令の歌一首」とあるのみであり、吉野に行った際の歌であることを前提にはできない。本論は、吉野に行ったか行っていないかの水掛け論を避けるため、歌表現から上二句について考えていく。

まず、「知る」の用例を見てみると、集中に二二四例あり、そのうち二二〇例が、

サ 梓弓 弦緒取りはけ 引く人は 後の心を 知る人ぞ引く

(2・九九)

のように何を「知る」かが判明する用例である。残る四例は次の通り。

シ 真木の葉の しなふ背の山 したのはずて 我が越え行け

ば 木の葉知りけむ (3・二九)

ス くことことは 死ななと思へど 五月蠅なす 騒く子ど

もを 打棄てては 死には知らず 見つつあれば 心は

燃えぬ かにかくに 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ

(5・八九七)

セ 近江の海 沖つ白波 知らずとも 妹がりといはば 七

日越え来む (11・二四三五・奇物陳思)

ソ 近江の海 沈く白玉 知らずして 恋せしよりは 今こ

そ増され (11・二四四五・奇物陳思)

シの歌は、「木の葉」が何を「知る」のかは表現からはわからない。「木の葉」が何を「知る」のかについては、『講義』が、

「コノハシリケム」とよむ。これと似たる語は巻七

「二三〇四」に「天雲棚引山隠有吾忘(下心)木葉知」と

あり。木(殊に柏木)に葉守の神の座すといふことは枕草

子などにもいひて、木葉に神の存すといふ信仰は古より存

せしならむ。然らずば、この歌は無意味に語を弄びたるに

止まる。

と述べる。「木葉に神の存すといふ信仰は古より存せしならむ」と

とまでいえるかはさて置くとしても、『講義』も引くように、

天雲の たなびく山の 隠りたる 我が下心 木の葉知る

らむ (7・一三〇四)

を援用すれば、こゝも「木の葉」が「我」の心を「知る」と把握できる。

スの歌は、憶良の「老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌七首」の長歌である。この「死には知らず」の「知らず」は、『時代別国語大辞典 上代編』の「知る」の項に、

◎知っている。精通している。熟練している。上に動詞の名詞形をうけ（その間に係助詞がくることもある）、下に打消の助動詞を伴って、くするすべを知らないという不可能を表わす。

とあるような不可能を表す用例と理解するのが通説である。多少強引ではあるが、意を解せば「死ぬことを知らない」とすることもできよう。

残り二例（セ、ソ）は、当該歌と同じく、「知らず」と「白」の「しら」の首で続いており、当該歌の類例といえよう。この二例は、ともに寄物陳思に配されている。セは、『新編全集』が、「近江の海の 沖の白波 知らなくても あなたの許とあらば 七日でも続けて来よう」と訳し、「沖つ白波―知らずのシラを起す同音の序。」と注する。しかし、最近のほとんどの注釈書は、『注釈』が、

近江の海の沖の白浪のやうに知らなくても、あなたのお住ひのところは知らずとも、あなたのお所といふのであったら、たとひ七日の日数を費しても山道越えても参りませう。

と述べるように、有意の序詞として扱う。この白波は、近江の海の沖の白波であつて、普通は見ることのできない、知ること

のできないものである。その点を勘案すれば、「近江の海の沖の白波のように知らなくても」と理解するのが妥当であろう。

次のソの歌も同様の問題を有す。『大系』は、「沈着く白玉―海底にある真珠。ここまで、シラズシテを導く序。」と注するものの、この歌も最近の注釈書は、『新編全集』が、

沈く白玉―シヅクは沈んで底に接している意。白玉は深密の佳人のたとえたが、シラの同音繰返しの効果をもねらつている。

と述べるように「白玉」に意中の女性を見出す。「近江の海沈く白玉」はそれを潜き取る海人でなければ知ることはない。この歌の「白玉」も有意と取るべきであり、「近江の海の沈んでいる白玉のように知らないで」と解するのが良いと思われる。

当該歌は寄物陳思に配されていないものの、これら二首と同様、「み吉野の水が激しく流れる所の白波を知らないけれども」と、歌表現に沿って解釈する方が自然である。もちろん、通説は、実景をとるため、有意の序として扱ってはいる。有意であると考えらるならば、なおさら当該歌において知らないものは、「み吉野の 瀧の白波」でしかあるまい。

以上、当該歌の「知らねども」の対象が、「瀧の白波」であ



ることを述べてきた。歌の中の私は、「瀧の白波」を知らない人間として造形されているといつてよからう。では、最後の主格転換について論を進めたい。短歌でありながら、主格が二度転換するという通説は成立するのであろうか。

#### 四 短歌における「ど」も「ば」の主格の転換について

集中の短歌において当該歌のように「ど」も「ば」と、已然形接続の「ば」が機能している用例は、三十六例存在する。その中で、

タ 刈り薦の 一重を敷きて さ寝れども 君とし寝れば

寒けくもなし (11・2520)

チ うつせみの 常の言葉と 思へども 継ぎてし聞けば

心惑ひぬ (12・2961)

の二例は、主格が転換しない用例の典型例である。タの歌は、主格が明示されていないものの、「一重を敷きて さ寝」のも「君とし寝」るのも、寒くないのも、歌の中の私であることは疑い得ない。チの歌は、「常の言葉」と「思ふ」のは歌の中の私、「継ぎてし聞」いているのも歌の中の私である。結句の「惑ふ」主格は「心」であるものの、「この心」は歌の中の

私の「心」であり、歌の中の私と同様に扱ってよいだろう。チもまた、主格の転換がない他の用例の範疇に収まるといってよい。

次のツとテの歌は、主格が転換する用例の典型例。

ツ 冬過ぎて 春し来れば 年月は 新たなれども 人は古

りゆく (10・1884)

テ 明日香川 瀬々に玉藻は 生ひたれど しがらみあれば

なびきあへなく (7・1380)

ツの歌は、「春」、「年月」、「人」と主格が変わっていくものの、主格が歌に記されており、主格の転換が明瞭である。テの歌では、「生ふ」、「あり」の主格は、それぞれ「玉藻」、「しがらみ」と明示されているものの、結句の「なびく」の主格は明示されていない。しかし、「なびく」の主格は、「しがらみ」ではなびきようがないため、「生ひたれど」と同じ「玉藻」が主格であることが読み取れる。三十六例中三十五例が、主格の転換の有無にかかわらず、その主格を歌の表現から理解できるようになっている。

残る一例は、主格の解釈が安定しない次の用例である。

ト 天雲の そくへの極み 遠げども 心し行けば 恋ふる

ものかも (4・553)

トの歌は、『注釈』がこの用例の主格の転換について、

恋ふるものかも——この「恋ふ」の主格を(a)作者と見る説  
(b)相手と見る説とある。これは当然(a)説であるべきである。第四句の「心し行けば」はいふまでもなく作者の心である。さうすればそれに「恋ふ」の主格も作者であるべきが当然である。主格の転換といふ事もあるが、それはその事の明瞭に示されてゐる場合であつて、むやみに主格を転換せしめて解すべきでない事は「妹があたりつぎても見むに」(二・九一—二)をうけて「家居らましを」とある場合、「見む」の主格が作者であると同じく「家居る」主格も同様である事その条で述べた如くであり、今もまた同じである。すなほにこの第四五句を読み下すならば、「あなたの方でも私を恋しく思ふものかナア」などといふ解釈にはならないはずである。く

と述べる。先述の用例からも諾える説である。『新編全集』が、  
○心し行けば——心さえ相手の所に届けば。○恋ふるものかも——主格は相手。  
筑紫の国は天雲の たなびく果ての 遠くであつても こ  
ちらの思いさえ届けば 惚れ返してくださるものでしょう  
か

かたりし継げば 古へ思ほゆ——土理宣令の歌——

とし、「心し行けば」で主格が転換するという説は、その根拠が薄弱であるといわざるを得ない。トの歌は、『注釈』のように、主格の転換を考慮する必要はないだろう。短歌において主格の転換のある歌は、歌に提示されるか、あるいは主格の転換なくしてはよむことのできない歌に限られているといつてよい。当該歌の理解に主格の転換は馴染まない。

## 五 むすび

以上、三—三番歌の通説における三つの問題点を一つずつみてきた。

- ① 「かたりし継げば」の主格を第三者とみなせる表現も未来や過去を示す表現もないため、その主格は歌の中の私としか考えられない。
- ② 歌の中の私が、知らないものは、「瀧の白波」である。「知らねども」の対格を結句を補読して「古へ」とする必要はない。
- ③ 「ど(も)・・は」を有する短歌において主格が変わる場合は、それが明確な場合に限られるため、「かたりし継ぐ」のも「知らぬ」のも「思ほゆ」のも歌の中の私である。そして、通説がそれぞれ例外の上に成り立つこともみてとれ

た。これらの例外の基点は、「知らないことはかたれない」と考え、「実際に吉野に行っているはずだ」という思考にあるのだろう。また、その中心となる「知らねども」の句は、集中に二例。

ナ 梓弓 末のたづきは 知らねども 心は君に 寄りにし  
ものを (12・二九八五異)

ニ くところづら 尋め行きければ 親族どち い行き集ひ  
永き代に 標にせむと 遠き代に かたり継がむと 処

女墓 中に造り置き 壮士墓 このもかのもとに 造り置  
ける 故縁聞きて 知らねども 新喪のごとも 音泣き  
つるかも (9・一八〇九)

ナの「知らねども」は、未来を「知らない」という意味である。ニは、高橋虫麻呂の菟原処女伝説の歌である。この歌では、「故縁聞きて」とその伝説について聞いてはいるが、「知らねども」が実際には経験していないことを表している。当該歌の「知らねども」もこの二例同様、実際には経験していないことを表現していると解すべきではなからうか。当該歌は、「み吉野の水が激しく流れる所の白波を私は実際には知らないけれども、吉野のことをこうして私がかたり継いでいると、古へのことが思い起される」と訳出されることが妥当であらう。

当該歌の景は、「み吉野の 瀧の白波」へと焦点化していく。しかし、歌の中の私は、焦点化されたその白波を知らない。それでも、「み吉野」に関する何かを歌の中の私がかたれば、「み吉野」の「古へ」が歌の中の私の心の内に浮かび上がる。上一句の焦点化が、結句の「古へ」をより具体的に描き出すのである。当該歌は、「み吉野の 瀧の白波」を知らないけれども、「み吉野」に関する何かを「かたる」ことによって、その「古へ」が思い起されることを歌っているのだろう。

(注)

- (1) 刀理宣令は、統日本紀によると養老五年正月に東宮侍講となつている。統日本紀の記事以外では、懷風藻に二首(63・64)、経国集に和銅四年三月五日付の对策文(巻二十、策下・对策)を二篇、そして、万葉集に二首(3・三一三、8・一四七〇)の作品を残す。
  - (2) 注釈書名は通行の略称を用いた。
  - (3) 「瀧の白波」のみを序詞とする説(『評釈(佐佐木)』など)もある。
  - (4) 歌の引用および用例数は、『万葉集電子総索引CD-ROM版』(二〇〇九年)による。ただし、一部私に改めた箇所がある。また、用例数は、当該歌を除く数である。
  - (5) 以下の用例は、訓が安定して訓まれていないため、本論の考察から除外した。
- ① く世間の 愚人の 我妹子に 告(つ)而(を)語(か)たりて(は)

く／＼づけてかたらく／＼のりてかたらく) しましくは 家  
に帰りて 父母に 羽毛告良比(こともかたらひ)／＼こと  
ものらひ) 明日のこと 我は来なむと いひければ、

(9・一七四〇)

② 我が背子が 將來跡語之(きなむといひし)／＼こむとかた  
りし) 夜は過ぎぬ しるやさらさら しり来めやも

(12・二八七〇)

③ くさ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの 小楳もがも

漕ぎ渡りつつも 相語妻遊(かたらひつつまを)／＼かたら  
はむめを／＼あひかたらめを／＼あひいふつまを)

(13・三三九九)

(6) この四四六三番歌の「かたり維ぐ」について、例えば『新編  
全集』では、

ほととぎすが 真つ先に鳴く夜明け どうしたら わが家  
の門を素通りしなくなるだろう 人に語り伝えるほどに

とし、「人に」と解釈している。『新編全集』は注において、

○語り維ぐまで—三九一四の「万代に語り維ぐべく」に合  
わせて、懐かしく思われる、のような内容が省かれている  
と思われる。

と述べる。『新編全集』のように四四六三番歌の「かたり維  
ぐ」の主格を歌の中の私として解釈しても、本論の結論に支  
障はない。

(7) 次の用例は、「ども」と已然形の「は」が並記されているが、  
当該歌と違ふ用いられ方がなされているため、除外した。

① 見れど飽かず いましし君が もみち葉の 移りい行け

は 悲しくもあるか (3・四五九)

② 恋といへば 薄きことなり 然れども 我は忘れじ 恋

かたりし継げば 古へ思ほゆ——土理宣令の歌——

ひは死ぬとも (12・二九三九)

③ 秋付けは 水草の花の あえぬがに 思へど知らじ 直  
に逢はざれば (10・二二七二)

当該歌の「は」、「ども」が重文であるのに対し、①の用例  
は、複文である。②は、「なり」で句切れとなり、「は」、「ど  
も」が二文に分かれて用いられており、並記されているだけ  
である。③の「秋付けは 水草の花の」は序詞である。「秋付  
けば」から「思へど」は、意味が繋がっているわけではない。  
よって、これらの用例は除外した。

また、

④ 恨登 思狭名盤 ありしかば よそのみそ見し 心は思  
へど (11・二五三二)

の歌は、初句の訓が「恨みむ」とか「恨めし」とかで安定し  
ない。その上、二句目も難訓である。二句目をここで仮に  
「思ひし背なは」と訓んだとしても、「恨みむ」で訓めば、

仕返しをしてやろうと あなたは思っ いらしたので  
離れて見ていました 心では思っていたのですが(『新編  
全集』)

「恨めし」で訓めば、  
ちように恨めしいと思っ折でありましたので、関係ないも  
のようになだそ知らぬ顔をしていました。心では思っ  
いたのですが(『釈注』)

となり、初句の主格が安定しない。よって、この一例も除外  
して考察を進めた。

(さかうえ のぞみ・本学大学院博士後期課程在学中)